慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	バーバー氏著 The Influence of the Gold Supply on Prices and Profits
Sub Title	
Author	高城, 仙次郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1914
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.8, No.6 (1914. 7) ,p.741(115)- 775(119)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	批評と紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19140701-0115

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

を一般に向上せしめんとする努力は單に獨逸のみならず、自餘の歐洲諸國に於ても著しき效果を齎らせしものなりとなせり、要するに本書は獨逸に於ける國家社會主義の性質及發達、比公の性格及社會的見地、其他、獨逸に於ける勞働保險發達の歴史、之れが英國法案との比較等を簡略に知らんとする徒にとりて好都合の參考書たる可し。（阿部生）

流行に關する國民經濟的觀察

(W. Troeltsch, Volkswirtschaftliche Betrachtungen über die Mode)

獨逸工業界最近の傾向としては、單に低廉なる品物を廣く販賣して、其「數量」的發達を促すを以て足りとせず、更に進んで「質」的發達を計らんとする點にありと信ず、而して現時獨逸に於て「流行」問題が屢々國民經濟學研究の對象たるに至りしことは此間の消息を語れるものにあらざるか、本書は著者が千九百十二年十月十三日「マーブルグ」大學總長就職の演說を公にせしものにして、先づ社會的慾望の產物たる「流行」其者の意義を明にし、更に需要と流行、小賣商と流行、生產上、勞働上、物價上に於ける流行の影響等を論じ、其結論として「流行」なるものは現時の消費、生產の諸方面に亙りて、之れが最中心をなすものにして經濟生活の重要なる現象として、彼は一種の Januskopf なり、若、此方面の經營にして其宜しきを得ば、需要は大となり、勞働者は從つて其業務を求むるを得べしと、要するに本書は僅かに六十六頁の小冊子に過ぎずと雖、尙ほ「ノイブルガー」の著(O. Neuburger, Die Mode, Wesen, Entstehen u. Wirken) と共に此方面の研究者にとりて好材料たる可し。（阿部生）

The Influence of the Gold Supply on Prices and Profits

By Sir David Barbour

千九百十三年倫敦マクミラン發行
中版一〇四頁東京實價金一圓七十五錢

本書の著者バーバー氏は印度の貨幣制度に精通せる貨幣論の大家なり。氏は曩に The Standard of Value (1912) を著はし貨幣數量說を論據として貨幣購買力高下の理を說述して印度幣制に論及せしが、本書に於ては貨幣數量說其物の說明に重きを置き印度幣制と該說との關係に論及するを避けたり。概して之を論ずれば、本書は The Standard of Value よりも論旨明快にして、記述も亦簡明なりと謂ふを得るが如し。

本書論旨の中心點は蓋し左の一節に在りと謂ふを得べし。（四七頁）

『貨幣數量說は左の如く言表はすを得。

他の條件にして變動せざる限りは、物價平準は貨幣の數量に比例す。

輓近此學說を非難する者を生じたれど、予は未だ一顧を値ひする反對論を見たることなし。此學說に關する論爭は打切とするを可とす。』

此貨幣數量說に對するバーバー氏の說明は大體に於てフイシヤー氏 (Irving Fisher: The Purchasing Power of Money, 1911) の解說と一致せるも、其數理的解說に用ひたる方程式竝に信用と物價との關係の說明に於てバーバー氏はフイシヤー氏とは異れる方法を採れり。卽ちバーバー氏の用ゐたる方程式は左の如し。（五十六頁）

$$P = Q \times \frac{E}{W}$$

Pは物價平準、Qは貨幣の數量、Eは貨幣の效率、Wは貨物取引高を表示す。貨幣の效率と

は貨幣の循環速度並に信用の基礎として用ゐらるゝ貨幣の割合を云ふ。バーバー氏は此方程式を用ゐて貨幣數量と物價平準との關係を說きて曰く、

『今假りにE/Wが半減せりとするも、Qが同時と二倍とならば、Pは何等の變動を蒙らざるべし。若し又、E/W十倍となり、Qが二倍とならば、Pは二十倍となるべし。要するに、貨幣數量にして著しく增減せば、必ず輕視す可からざる結果を生ず可し。他の原因に依りて物價平準は貨幣數量の增減に依るよりも一層著しき變動を蒙むることある可けれども、假令此種の變動が如何に甚大なるにせよ、若し貨幣數量をば適宜に調節せば、此變動を中和することを得可し。要するに、E/Wなる數は漸次に變動するも急激に增減することゝなし。』

著者は進んで貨幣數量說の根本的に眞理なる所以を論じ、斷言して曰く。（五十九頁）

『他の條件にして變動せざる限りはなる貨幣數量說の假定は其學說の應用に對して重要なる制限を加ふるものなりと雖も、貨幣問題を講究する者が自己の主唱する貨幣政策を討究するに際して貨幣數量說を無視するを得ざるは猶ほ天文學者が天體の運動を研究するに當りて引力の法則を無視すること能はざるに異ならず』と。

著者は又物價平準に及ぼす信用の影響に論及して曰く、（二十五—六頁）貨幣數量說の反對論者は定額の銀行貸付を以て物價に對して同額の貨幣と同一の影響を與ふるものなり（例へば一億圓の貸付金增加と一億圓の貨幣增加とは同程度の物價騰貴を誘致す）と云へども、此見解は誤れり。著者の意見に據れば、貨幣の增減は物價に對して信用よりも著しき影響を與ふるを常とす如何となれば、一億圓の貸付金增加は單に夫れ

丈の影響を物價平準に及ぼすに過ぎざるも、一定額の貨幣は其數倍の貸付金に對する銀行の支拂準備として用ゐらるゝものなるを以て、一億圓の貨幣の增加は數億圓の信用增加を意味し、從つて物價に對する其影響は單に信用が一億圓增加せる場合の數倍に上る可ければなり。從つて流通貨幣額よりは多額に上り且つ急激に增減する銀行の貸付金は物價に對して貨幣よりも遙かに著しき影響を及ぼすものなりとの貨幣數量說反對論者の說は取るに足らず。

金貨國に於ては一貨物の價格は之と交換せらるゝ一定量の金を代表するものなれば、信用制度が貨幣としての金の使用を節約し其價値を低下せしむる以外に於て物價に何等の影響を與ふるものに非ざるなり。加之、信用制度は現金支拂に要する時と手數とを省き且つ資本の利用を容易ならしめ從つて貨物の生產費並に取引の費用を節減せしむるものなるを以て、此制度をば物價平準を上騰せしむるの一原因と看做すことを得ざる也。

著者は更に轉じて貨幣數量說の實際的價値に論及して曰く、（六十五—六頁）

貨幣數量說を代數的に表示せる

$$P = Q \times \frac{E}{W}$$

中に於てE/Wが如何に著しき變動を蒙むることありとするも、若しQを適宜に調節せば、P卽ち物價をして吾人の欲する平準を保たしむることを得べし。勿論E/Wの變動餘りに急激にして、Qを如何に激增又は激減するとも、Pをして一定の標準を維持せしむるの不可能なることある可きは想像し得られざるに非ざるも、實際に於てはE/Wは一定の少期間中にQの調節に依りてPを維持すること不可能なる程激變するものに非ず。されば、吾人にしてQを調節し得る限りは、吾人は物價平準を任意に維持すること

とを得るものなり。印度及び金貨流通せざる他の金貨國が金貨本位を維持することを得るは卽ち此Qの調節力を利用しつゝあるが爲めに外ならず。

以上は著者主張の梗概なり。貨幣數量說に對するバーバー氏の說明は多少重複又は矛盾せる所なきに非ざれども、概して穩健なりと謂ふ可きか。されど、信用を物價の關係に就きて著者が述たることに對しては多少の疑問を懷かざるを得ず。一定額の貨幣の增加が同額の信用の增加よりも物價に對して著しき影響を及ぼす可きは著者の言の如くなりと雖も、流通貨幣と銀行貸付との間に於ける數量的關係は少期間內に變更すること稀なるも長期間には漸次變動するものなるを記憶せざる可からず。若し果して然らば信用は貨幣と獨立に物價に影響を與ふることありと云ふ可く、從つて吾人は物價平準に對する信用制度の影響を輕視す可らざるなり。次に

著者は信用制度の運用は貨物の生產費を低下せしむ可きを以て、此點より論ずれば物價騰貴を誘致するの一原因なること能はざるものなりと斷じたれども此斷定は生產費說を根據とせるものにして、吾人の贊成するを得ざる所なり。各貨物の價格は需用と供給に依りて定まるものにして生產費のみに依りて定まるに非ず。されば。若し銀行の貸付增加せば、貨物の需用は增加す可く、從つて貨物の供給にして同一程度に增加せざる間は、假令生產費が同時に低減するとも、其價格は騰貴す可し。勿論其供給にして增加せば、物價は騰貴せざることあるべけれども、著者自身も云へるが如く、（二十五頁）信用制度其物は直接に貨物の現存量を增加せしむることを得ざるなり。貸付金の增加は勿論生產を刺激すべけれども、新生產物が市場に提供せらるゝ迄には多少の時日を要す可し。而して此期間內に於ては物價は騰貴するの傾向を有す可し。著者は貨幣數量說の反對論を辯駁するに努めたる結果物價に及ぼす信用の影響を輕視するに至りしが如し。

著者は附錄として卷末にウオーカー氏の國際兩本位制の一節とニコルソン氏の貨幣論の一節とを收めたるも、（八十九—百四頁）此附錄が本書の紙數を增加する以外に於て大に其價値を高めたりと認むることは困難なりと云はざるべからず。

概して之を評せば、本書は著者が曩に發表せるThe Standard of Value若しくはフィシャー氏、レイトン氏等の統計的研究に比敵するものに非ざるも、說明の單純なる、行文の明決なる、見地の哲理的なる諸點に於て一種の特色を備へたる貨幣數量說の最近の說明として評者は之を江湖に推擧するを躊躇せざるものなり。（高城）

What is Money?

by A. Mitchell Innes

千九百十三年紐育銀行法令雜誌社
大版三十二頁東京賣價四十八錢

此小冊子は紐育市に於て發行せらるゝ銀行法令雜誌（Banking Law Journal）の千九百十三年五月號に揭出せられたる一論文を單行本として再版せしものなり。著者は目下貨幣の本質を講究しつゝありて孰れ浩瀚なる一書を著はす豫定なるが、研究を進むるに從ひ貨幣に關する在來の學說に一大誤謬あるを發見し玆に自己の意見を發見して世に問ふに至りしなりと。著者の主張の梗概は左の如し。

經濟學者間の定說に據れば、最初貨幣なるものの存在せずして人は物と物とを交換し所謂交換の媒介物を使用せざりしが、其後人の最も需用する或る貨物が交換の媒介物として用ひらるゝ